

## 企画展

# てくてく、ふらり、のんびり 旅する浮世絵

この展覧会では、葛飾北斎が描いた全国各地の名所の風景や、旅人たちの様子を題材にした浮世絵をご紹介します。北斎は50代半ばから絵の仕事をする傍ら日本各地へ旅に出て、その先の気に入った風景をスケッチしていました。旅をする際、筆や帳面を持ち歩いていったという北斎は、目の前に広がる景色と出会った感動をその場で描き留めていたといいます。この展覧会では北斎の旅に関する作品を巡りながら、各地の風景、名所、人々の様子をまるで自らの足で歩いて周るような視点でご紹介します。北斎が描いた風景への旅へ出発しましょう。

## ■北斎漫画

ほくさいまんが

絵を志す者のための絵手本(教科書)として発表されたが庶民にも愛され大人気となった北斎の傑作のひとつ。

甲州三鳥越

信濃小野の滝

籠の渡り

上毛榛名

出羽 秋田の落

信州諏訪湖 氷渡

## ■富嶽百景

ふがくひゃっけい

あらゆる富士の姿、風景を一堂に収めた版本作品。

霧中の不二

松山の不二

八ヶ岳の不二

不二の室

七橋一覽の不二

宝永山出現 其ノ二

柳塘の不二

## ■富嶽三十六景

ふがくさんじゅうろっけい

北斎の代表作である風景画。江戸時代に盛んだった山岳信仰を背景に江戸時代大ヒットした傑作。

下目黒

青山円座舎

東都駿台

東海道吉田

武州千住

隅田川関谷の里

東海道程ヶ谷

甲州三鳥越

駿州江尻

甲州犬目峠

武州玉川

登戸浦

相州江の島

見延川裏不二

相州仲原

## ■春婦斎北妙筆

富嶽三十六景

しゅんぶさいほくみょうひつ

ふがくさんじゅうろっけい

上方(京都、大坂)の絵師による富嶽三十六景の模写作品。

遠江山中

東海道程ヶ谷

御厩川岸を両国橋夕陽

甲州石班沢

信州諏訪湖

上総海路

## ■諸国瀧廻り

しょこくたきめぐり

水の靈性に着目し、各地の瀧を描いた風景画。現実ではありえないデザイン的な瀧の表現に注目。

木曾路ノ奥阿弥陀ヶ瀧

下総黒髪山きりふりの瀧

和州吉野義経馬洗瀧

東海道坂下清瀧くわんおん

相州大山ろうべんの瀧

木曾海道小野ノ瀑布

美濃国養老の瀧

東都葵ヶ岡の瀧

## ■諸国名橋奇覽

しょこくめいきょうきらん

各地の橋を題材にして作られた風景画シリーズ。

足利行道山くものかけはし

東海道岡崎矢はぎのはし

山城あらし山月吐橋

ゑちぜんふくみの橋

摂州天満橋

かめみど天神たいこぼし

かうつけ佐野ふなはしの古づ

飛越の堺つりはし

## ■鳥瞰図

ちょうかんず

鳥が空から地上を眺めたような構図が特徴。細かい筆遣いは見る者を圧倒します。

東海道名所一覽

総房海陸勝景一覽

木曾路名所一覽

唐土名所絵

百橋一覽

## ■琉球八景

りゅうきゅうはっけい

現在の沖縄、琉球を題材にした作品シリーズ。南国の空気が漂う作品。

中島蕉園

城嶽靈泉

(参考展示)椿説弓張月

## ■阿蘭陀画鏡

おらんだえかがみ

西洋の銅版画を意識して制作された版画作品。異国風の描き方に注目。

両国

吉原

観音

堺町

## 版本展示室

---

北斎漫画  
絵本隅田川兩岸一覽  
百囀  
東都名所一覽  
東都勝景一覽  
画本東遊  
絵本狂歌山満多山

## 肉筆画展示室

---

かれい、めばる、さより  
えび、さば、あわび  
椿と鮭の切り身  
猫

黒衣着物を着た美人  
桜下太夫立姿  
月下美人図  
潮干狩  
太夫立姿

品川御殿山花見  
河骨図  
大原女と馬

二美人  
東海道旅行  
潮干狩り  
野馬  
砧打ち 三島の玉川

## 祭屋台展示室

---

東町祭屋台  
天井絵 龍・鳳凰  
上町祭屋台  
天井絵 男浪・女浪

### 北斎は 旅が大好きだった？

江戸で生まれた北斎は、絵を描き続けた生涯の中で日本各地を旅したといわれています。四十代半ばから五十代にかけて、現在の千葉県にある木更津や山梨県甲州地方、三重県、大阪府にあたる伊勢、大坂、そして和歌山県の紀州地方などへも足を運んだといわれています。

### 絵を描くための旅

北斎は旅をする際、筆や帳面を持ち歩いていたそうです。気に入った風景やものがあればその場でスケッチしていたといわれていますが、北斎の風景画の傑作「富嶽三十六景」が誕生したのも、北斎が旅をしたからだといわれています。

### 信州 小布施への旅

北斎は晩年の八十代半ばごろ、信州小布施の豪農商であった高井鴻山に招かれ小布施を訪ねます。江戸から小布施までの距離は約200キロ。自らの脚でその道を旅したと伝わっています。このころ江戸では質素儉約を謳う天保の改革などで、今までのように絵を思ったまま自由に描くことが難しくなり、江戸から離れ地方へ向かったのではないかと

もいわれています。  
北斎の絵に対する思いが遠い地へ向かう力にもなったのでしょう。

---

メモ